十、伝説・昔ばなし

源　頼朝と笹

源頼朝通過説

源頼朝が安房に挙兵して軍を三路に分け、上総の西岸及び東岸を進むものと中央の山路を越えるものとがあって、中央の進路は長狭地方から香木原に入り、北に進んで木更津の畳ケ池付近で西岸を進んだ軍と合流したと伝えられている。現在は西岸説が有力で笹を通過したかどうか明らかではないが、中央を進んだ軍の通路を仮に小糸方面としても、その一部隊が香木原・笹方面を通過したことも考えられる。

八国※1と甲坂※2

源頼朝が安房から北上するとき、八国に到着して全軍を調べたところ、武士の国籍が関東八国の何れかに所属していたという。それ以来八国の地名がつけられたと伝えられている。

さらに笹へ入って装束を改め烏帽子※3を「かぶと」に変えたことからその地を甲坂というようになったと言われている。

※1　八国…片倉地先で三～四ヘクタールもある平らな草原であった。なお、直径一・五メートルもある松の大木があって旗掛けの松といわれていたが枯れて今はない。（現在この地に県立少年自然の家が建設された。）

※2　甲坂…県道千葉鴨川線沿いで昔の面影はないが、三島へ通じるむかしの道の分岐点でもある。

※3　烏帽子台（えぼし台）…香木原地先で頼朝北上の時強い風のために烏帽子をとばされたところだと

いわれている。

摺コギ棒で一駄草を苅った話

このお話は文政十年前後の実際にあったことを今に伝えているお話である。天保三年生れの一兵衛と云う人のトンチ話である。昔から若衆の夜遊びの習慣が昭和の初期まで続いたそうだ。勿論当時は村の若い男達が神社に集り、夜明し遊んで朝飯前に一仕事して帰宅し、それから本業に移るという、今にして見れば全く想像もつかないことであった。

夕めしを済ますと、夫々各自の愛馬を神社の境内まで引張ってきて、夜中縛がれ、可愛想に馬は夜明け近くまで露天で過ごさねばならなかった。夜明けと云っても、まだ真暗で現場八国まで灯ちんを用いての朝草苅であった。

この伝説はその一場面の出来事を先祖から聞いたもので確かな物語である。ヒーローである一兵衛と云う者は生れ乍らにかん境に恵まれ、兄の一人は武蔵の川越藩士の目付役であり、もう一人の兄は当地の名主であった。四人兄弟の末の子であった。

このような情況からして、世間へ出て何等はばかることなく意の儘に過ごした我儘な男でもあった。気性は荒いし、侠客肌のけんか好きで、けんかがあれば必ずといっていい位に相手の一人であったそうだ。腕に自信があったので何時でも弱い方に助太刀し、弱い者の味方であった。ある時鹿野山のお祭りで全国から集った侠客達とけんかとなり、命拾いをしたこともあったという話も聞いている。

この男は鼻は並より高く、俗名を天狗といい、口も八丁、手も八丁、ハブリをきかせていた様だ。そこでこのお話しの本論に入りますが、一兵衛なる男は仕事も人一倍達者で仲間からは時には嫌われることもあり、誘われない事もしばしばあった様にきいている。

余り達者なことに仲間からしくまれて馬のくらに差してあった鎌を棒にすり替えられ、道中暗い為に気が付かず、現場へ到着、さて草を苅ろうとしたら鎌がない。普通の人ならそこで大声でさわぎ立て、夢中でかまのありかをただし、わめくことだろうが、しかしこの男は何時もと何等変わらず一声も発せず、彼いわくさあ野郎共、早く一駄にまとめようぜ、といいながら暗い草原へと姿を消した。それには連れのみんなは不思儀に思い、気味悪さにふだんの通り作業開始である。

ところが鎌のない者が一番先きに一駄を作り、さあ野郎共、俺は苅り終ったぞ、と大声でさわいだ。見るとな

んと馬の背には草が山積みされているではないか、これには仲間はびっくりぎょう天、それもその筈、暁暗といっても辺りは暗かったので、みんなの苅った草を後から失敬して集めたもので、鎌を用いた者は草は少なく、棒で苅った一兵衛は何時も通りの一駄草を苅ったと云う誠にうそでない実話として今に子孫や世間に伝えられているとん智のきいた男の話である。

仲間からは自分達が悪いから草をぬすまれても、一言も云えなかったそうだ。

氏神講〈ウチカン講〉

一月十七日・十月十七日の年二回。各組（一～五番組）毎に宿（輪制）の家に米二合と会費を持って集まり、ニワトリ・ゴボウ・ニンジン・コンニャク等で手料理をし、大山祇命（山神社の祭神）の掛軸を飾って夜遅くまで飲んでダベった。後に酒の肴持ち寄りとなり、最近は宿の輪番制をやめて青年館や近くの飲食店などでいわゆる飲み会となった。